



山登りの思い出

12月7日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月7日のおはなし「山登りの思い出」

えっ？ なんだって？ そんな山、聞いたことがないって？ ああ。まあいいだろう。おじいちゃんはその名前がいちばん好きでな。えっ？ ヘンな名前だって？ うん。まあ、えみるにはそう聞こえるかもしれんな。しかしおじいちゃんには「えみる」っていうのも、何だか不思議な名前に思えるんだがな。お前のお父さんがどうしてもその名前がいいって、ひらがなで「えみる」だ、って言い張るからそう決まったんだが。

いやいや、そういうことじゃない。悪い名前ってことじゃない。ただあれだ。おじいちゃんは聞き慣れなかったから、ほら、びっくりしたというか。えっ？ まあ、うん、そうだな、あれだ。うん、かわいい、名前だと思うな、「えみる」。うん。名前なんてのは自分が聞き慣れないとちょっとヘンに聞こえるってだけのものかもしれんな。うん。

おじいちゃんの山登りの話だったな。ヘンな名前の山の話だ。それはな、世界の頂上という意味なんだ。なんと言ったかな、ネパールの方の古い言葉、サンスクリット語らしいがな、詳しいことはわからん。とにかく、世界の頂上、だ。どうだせいせいするような名前だろう。おじいちゃんはネパールから登ったからその名前と呼んどるんだ。他の名前もあるにはあるが、おじいちゃんは好かん。

ああ。えらい騒ぎさ。何しろ世界の頂上だからな。ここに登りたいって人がたくさんいて、世界中から遠征隊がわんさかわんさか大勢でおしかけてな、あっちこっちに、やれベースキャンプだ、やれ第何キャンプだ、アタックキャンプだ、とまあ、大のおとながよってたかって大騒ぎして、シーズンになると、ちょっとした村か町ができたような有様さ。

ああ？ おじいちゃんは違う。そういうのはやらなかった。おじいちゃんはな、そういうのは好かんから一人でな、勝手に行き勝手に登ったんだ。後からあれこれ文句を言う奴もおったが、そんなのは知らん。山に登るのに、なんでいちいち登り方を指図されにゃならんのか、おじいちゃんにはわからんな。えみるも、そういう頭の固い人間にはなるんじゃないぞ。

登り始めて間もないところにな、氷の柱がニョキニョキ立っているようなところがある。柱の下をくぐったり、上に乗って長い棒を橋渡ししながら渡ったりするんだが、これがよく崩れてな。落っこちたり、氷に押しつぶされたりしてたくさんの方が命を落とす。あれはひどいもんだ。トバ口からいきなり命がけでな。ああ？ おじいちゃんが危ない？ はっはっは。大丈夫大丈夫。そこで死んどったら、いまこうして、えみるに話はしてないんだから。何？ 無事だったのかって？ むう。

本当を言うとな、いままで誰にも話しておらんのだが、あれだ、実はその、落っこちた。いやいや。氷の柱のところは何とか通ったんだが、それでちょいと気がゆるんだのかな。それよりずっと上の方の何でもないところで、氷の裂け目を滑り落ちてな。深い谷底みたいなところに落ちた。谷底といっても氷でできた谷だ。氷だけの世界だ。そこからえっちらおっちら歩いて、地底湖を見つけて、これを泳いで渡って外に出た。

すると、そこに女がおってな。おじいちゃんを見るなり、おじいちゃんと結婚すると言うんだ。え？ おばあちゃんが一緒にいたのかって？ ああ。あのう、その時はな、おじいちゃんはまだ若くてな、結婚はまだしておらんかった。それがおばあちゃんなのかって？ まあ聞きなさい。それでその女に案内されて。いや、おかしいとは思ったんだがな。そんな山の中に女がいきなりぽつんというなんてな。おじいちゃんが一人で登っただけでもこっぴどく叱られるような山だ。女が一人ですたすた歩き回るようなところじゃない。

でもどうしたわけか、その時はそんなことは気にもならず、女の家に着いた。家と言っても洞窟だ。中に入るとたくさん人がいてな、みんなおそろいの毛皮を着ている。よく見ると女も同じ毛皮を着ている。それから飯を食わしてもらって、すぐにええと、あのう、そのあれだ、女と

ほれ、結婚というか何というかつましまあ、いたしてだな、そこで暮らすことになった。

山登りはどうしたのかって？ まあそれはもっと後の話だ。そこで暮らすようになってしばらくしてからおじいちゃんは気がついたんだな。それがユキヒョウの一族だってことにな。ん？ あ。いや。人の名前じゃない。ユンピョウって人がいる？ ああそうなのかい？ 似てるな。でもたぶんその人とは関係ないな。だって人じゃないんだから。ユキヒョウなんだから。

そうなんだ。おじいちゃんは山の神様と結婚して暮らしていたんだ。子供も産まれてな。小さいうちは人間の姿によならんから、ユキヒョウの姿のまんまでな。これはかわいいもんじゃよ。大きな子猫みたいなもんでな。それにえみるもいつかユキヒョウと暮らすことがあったらわかるが、ずいぶん人懐こいもんなんだよ。2年半。2年半そこで暮らした。狩りの仕方を教わって、山での暮らし方を教わって、生きていく掟を教わった。

おじいちゃんがある日、やっぱり世界の頂上に登りたいと言ったら、ユキヒョウの一族はみんな快く送り出してくれた。前の晩にはご馳走をたっぷり用意してくれて、みんなが代わる代わる挨拶に来てくれてな。なんだか薄気味悪いくらいのもてなしでな。いま思えば、それがお別れになると、あっちはわかっておったんだな。そうと知っていたら、出かけたかどうか、今でもよくわからん。

洞窟を出てすいすいとお山に登り、世界の頂上を踏んで、降りてきたらもうそこには洞窟はなかった。さんざんばら探したがどうしても見つからなかった。おじいちゃんはな、いいか、これは誰にも言っちゃいかんぞ、おじいちゃんは山の中を歩き回りながら大泣きに泣いたんだ。わんわん泣いた。涙がかれて出なくなっても泣いた。そうしたらちびが来たんだ。おじいちゃんとユキヒョウの奥さんの子どもだ。もう人間の姿になれるくらい大きくなっていたのに、ユキヒョウの姿のまんまでな。そしてわしの顔の涙をペロペロペロペロなめて、それからきっぱり立ち去った。

それでもユキヒョウとの生活は終わりだということが、おじいちゃんにもわかったんだ。それで帰ってきて、やっぱりみんなから怒られたわけさ。一人で登るなんてとんでもないってな。何だって？ えみるはユキヒョウの子どもなのかって？ ああ。ええとそれはあの、またちょっと違うんだがな。でもまあそういうところも少しはあるかもしれん。そうかい。一緒に行きたいかい。嬉しいねえ。そんな風にできるといいんだが。

ほらほら。お母さんが帰ってきたぞ。玄関まで迎えにいったいで。ちゃんと挨拶をしてな。お帰りなさいってな。はいはい。えみるはいい子にしてみましたよ。ああ。一緒におしゃべりをした。山登りの話をな。今度一緒に登ろうってな。

(「ユキヒョウ」 ordered by カウチ犬-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

山登りの思い出

<http://p.booklog.jp/book/39942>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39942>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39942>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.